

学生の一步後ろからリードする実習巡回指導 ソリューション・フォーカスト・アプローチ活用の試み

荒木 重嗣

On Practice education by visit interview to lead from the one step back of a student
Attempt of Solution-focused approach use

Shigetsugu Araki

1. 研究目的

介護福祉実習における教員の実習巡回指導は通常週2回実施することが義務づけられている。特に1年次のような実習体験の少ない段階での実習は学生にとって不安が多く、指導する教員との面談、実習指導者からの直接的な指導・支援、実習生同士での支え合いがその成長にとって重要な鍵となる。

そのため巡回する教員は、短時間での巡回指導面談によって、実習学生の気持ちの揺れや実習達成感、不全感を把握し、学生がみずから解決する、もしくは実習体験によって新たに体験し、発見することを通して学生の成長を支援することが求められている。しかしこの巡回指導をどのように行うかについての理論的な体系はまだ確立されておらず、教員個人のスタイルにまかされているのが現状である。

このような実習巡回指導における教員に求められる課題に対して、面接指導に活用できる技法として現在私が試みているものは、短期療法（ブリーフセラピー）の1つである、ソリューション・フォーカスト・アプローチである。本報告では、教員の巡回指導記録と巡回指導を受けた3人の学生の実習記録の内容をもとに、ソリューション・フォーカスト・アプローチを活用した巡回指導面談がどのように学生の実習記録等に影響を与えているのかを考察した。

2. 研究方法

- (1) 分析方法：1年次1段階後期実習（2006年8月、10日間の施設介護実習）での、私の行った巡回指導記録と3名の学生が書いた実習記録から一致するキーワードを選択し、そのキーワードもしくは類語の記述がどのように学生の実習記録に出現するかによって、実習巡回指導の面談内容がどのように反映されているか、また反映されていないのかを考察した。
- (2) 対象学生：分析の対象とした学生の実習記録は、面談指導で学生指導に活かしていない1名（T・1名実習）と指導がうまく活かしている1名（K・1名実習）および2名実習で行い、グループ指導をおこなった学生の1名（H）の3名分を分析の対象に選んだ。

- (3) 活用した主な面談技法
 「例外を探す質問」「スケーリング・クエッション」
 「ミラクルクエッション」「コンプリメント(賞賛)」
- (4) 実習指導回数 10日間の実習期間で4回
 1回の面談は40分から60分程度

3. 分析—実習巡回指導は実習過程にどのように影響しているのか、いないのか

- (1) 学生T(身体障害者療護施設、1名での実習)の場合—実習過程の展開に影響がほとんどみられない例

Tさんは人見知りが極端に強く、前回の6月実習においても積極的コミュニケーションをはかることが課題になっていた。8月の実習も同じ実習先であったため、比較的緊張なく実習をおこなっていた。初日の巡回指導記録である。

後期実習初日の巡回指導である。一人での実習に関わらず比較的緊張なく実習をおこなっていた。主任から指示のあった毎日の目標について、おおざっぱにどんな目標が立てられるかを10個相談しながらあげて、ノートにメモをとらせた。また私と主任との話しをしている際、自分だけ座っていた点について気づかせ、あわせて、明確な返事を適切なタイミングで行うことのトレーニングをおこなった。

その日の本人の実習記録である。

- 1) 実習目標について
 本日の実習目標「一日の流れを確認し、身体状況の変化を知る」という内容は、前回の事を覚えていたのですぐに分かりました。身体状況の変化を知るといのは、トイレに入ったときなど傷がないか確認していました。
- 2) リハビリについて
 利用者さんのリハビリに同行させていただいた際、しり取りしながら施設内を一周したりボールを使ったリハビリでは一緒に参加させていただいた時、利用者さんのリハビリは無理にさせず体調の良い時にしている事が分かりました。
- 3) コミュニケーションについて
 久しぶりの実習という事もあり、前回より元気がなく暗くなっていたせいで利用者さんと積極的にコミュニケーションをはかる事ができず一日を過ごしてしまいました。次からは明るく元気でコミュニケーションをはかる事ができればいいと思いました。

一見元気そうにみえたが、記録には「前回より元気がなく暗くなっていた」と表現をしている。巡回指導での内容は何も記録上には反映されていない。

さらに、その後2日目の巡回では

前回の指導後に何がよくなったかと問う。本人は「返事をしっかりとするようになった」「緊張感が和らぎ返事ができ笑顔が増えた」と自分自身に対して、よい変化を見つけている。そのことにより介護技術を意識して教えてもらうよう意欲的になることができ、その結果入浴着脱の方法について職員さんに質問して、技術のこつがつかめたことを話している。
 また利用者との会話がうまくできない方がいる。特に失語症の方や構音障害で言葉が聞き取りにくい方などに対してどうしても積極的に聞けない自分を説明している。

その前日の本人の実習記録および巡回日当日の実習記録にはつぎのように記載がされている。

1) 実習目標について

本日の実習目標「入浴前後の着脱の介助をする」という内容は、入浴の時間に着脱をさせていただき、また、やり方が分からなかった時に教えていただいたので理解することができました。

2) リハビリについて

利用者さんは積極的にリハビリに取り組んでいる事が分かりました。そして楽しそうに行っていました。風船を使ってリハビリをした利用者さんが笑いながらしてくれたのでよかったですと思います。リハビリを通して、利用者さんと少しだけコミュニケーションをはかる事ができたと思いました。

巡回日当日の実習記録の記載

1) 実習目標の達成について

本日の実習目標「いろいろな利用者さんとコミュニケーションをはかる」という内容は、昼食の食事介助や民謡ボランティアを見に行った時、水分補給の時間など利用者さんと接する時間が長かったため、思っていた以上にコミュニケーションをはかることができたと思います。

2) 食事介助について

昼食と夕食の時に食事介助をさせていただきました。利用者さんのペースに合わせて食べさせることが難しいと思いました。それとのみこんだということを見分けるのも難しかったです。しかし最後まで食べていただけたのでよかったです。

感想

今日はコミュニケーションの時間が多くあったので、少しは利用者さんとコミュニケーションをはかることができ、話しをすることができたと思います。しかし、話しを展開することができなかったため明日から話の展開を心がけようと思います。

実習巡回指導で明らかになったのは、前日までに体験した内容を振り返ることはできているが、それは積極的に職員に着脱介護の技術について聞けたという点に焦点があてられており、その内容や他の障害レベルの場合への応用等の介護福祉の専門的技術理解へとは展開されていないことがわかる。

自分自身の小さな変化に気づき、自信を持ち始めた段階で、さらに具体的な学習意欲へと結びつける指導が必要であったのである。

しかし巡回教員の私は本人のコミュニケーション力不足という面のみに意識が集中してしまっており、学生が介護技術を習得し、技術レベルが向上するという方法から、コミュニケーション力のアップするような多面的な成長方法を意識できていない。

(2) Kさんの場合—実習過程の展開を実習巡回指導面談で確認し、新たな気づきにつながった例

Kさんは地元の特別養護老人ホームで6月に初めての实習を行い今回が同じ実習先での2回目の実習である。積極的に実習に臨む態度が前回実習で評価をされていた。

1日目：今日学習したこと

見守りとは？ 職員の方々が見守りについて話しあっていた。私も深く見守りについて考えたことがなかったので、良い機会になった。話し合いでは、「何かあった時にすぐに手がだせる状態」となった。実習中でも利用者さんが車いすを押してくれと頼まれることがたびたびある。しかし利用者さんは自走できる方である。すぐ手を貸すのも見守り、もう少し自走してもらってから手を貸すのも見守り。考え方によって見守りは幅が広く様々なことがわかった。利用者の方に「触るな」など、移乗の際言われ、見守りをしていても、もし利用者さんが転倒してしまい大けがになってしまったら大変な事だ。利用者さんに拒否されても、踏み込む勇気も時には大切だということがわかった。これからも実習を通して、見守りについて考えようと思う。

感想

(実習)初日とあって、久しぶりなので緊張した。しかし久しぶりに利用者さんの元気そうな様子を見て、嬉しくなった。6月の実習時よりも、少し元気がなくなったと思う方や、逆に元気に自分で食事が食べられるようになった方がいらした。私の事を覚えていてくださった利用者さんもいて、嬉しかった。10日間なので、ゆっくり精神面と技術面を磨きたい。明日もよろしくお願いします。

2日目の巡回指導記録である。

実習2日目、前回と同じ実習先であるため緊張感なく実習を行っている様子がうかがえた。今回の個人目標を確認。「コミュニケーション技法の向上」

利用者の2ヶ月での変化について質問をすると、身体状態が良く、また悪くなっている方があった。特に良くなっている方については、その原因を考察してみたいとのこと。

Kさんは実習初日で、利用者の状態の変化について観察しており、巡回指導でもそのことをしっかりと説明でき、またその変化の原因についても考えてみたいと希望していた。

以後の巡回指導日までの実習記録である。

2日目：今日学習したこと

入浴介助を体験して：機械浴の介助をさせていただいた。入浴を待っている利用者さんの表情から、入浴をととても楽しみにされているのだと思った。職員の方はとても声かけが上手く、利用者さんも楽しそうにお話されているのが印象に残った。力加減は慣れたと職員さんがおっしゃっていたので、少しずつ慣れていきたい。

排泄介助にて：女性の利用者さんが吐き気を伴っており、私は職員さんの介助の様子を見ていることしかできなかった。とても辛そうにされていて、職員さんは「難儀いよね。ごめんね」とおっしゃっていた。服を着替えてから職員さんが声かけを行った時、その利用者さんはにこっと微笑んでいた。その笑顔がとても印象に残っている。その利用者さんは言葉を発せない方だけど、職員さんはとても心が分かるような声かけをされていて感動した。会話が難しい方の心をいかにわかってあげられるかが、とても介護士には重要な事だ。私も利用者さんが何も言わなくてもわかってあげられる介護士になりたい。

感想

実習は学ぶ事ばかりでとても楽しい。だんだん利用者さんの名前を覚えてきて、事前に利用者さんのお名前を呼べるようになってきた。お名前を呼んでから声かけをすると、しっかり私の顔を見てくださり、コミュニケーションがとれやすかった。これからも、もっとおおくの利用者さんの名前を覚えたい。明日もよろしくお願いします。

3日目：今日学習したこと

利用者さんと向かい合うことの大切さ

お茶だしの際、お茶の温度と誤嚥に十分注意するよう指導を受けた。Sさんの介助をさせていただいた。Sさんは食事全介助の方で会話が難しい方である。哺乳びんを使用した。片手で手をにぎったり肩をたたいたりしながらゆっくり声かけをし、行った。

表情をよく見ると、変化がわかり今までよりも利用者さんとちゃんと向かい合っている気がした。声かけも自然にできるようになり、「今、利用者さんと向かい合っている」と実感した。目をよく見て声かけなど一生懸命向き合えば、利用者さんもちゃんと返してくれることがわかった。今までは会話の難しい利用者さんが苦手だったけれど、今日をきっかけにもっとしっかり向き合えると思う。

職員さんのマジック

リハビリの際、手足のリハビリを拒否したSさんだったが、職員さんの声かけや手技のマジックにより歌にあわせ、一生懸命足あげを始められたのです。声かけもとても上手く感動した。リハビリというのではなく、足をさすって足あげにもっていく、とても自然で拒否したSさんが不思議に

思えるくらいスムーズに行っていた。リハビリだけでなく、多くの面で職員さんマジックが見られる。とてもすごく尊敬する。自分もそんな風になりたいと思う。

感想

前回の5日間の実習よりも、より多くの利用者さんとコミュニケーションがとれるようになってきた。自分から積極的にコミュニケーションを取りたい。明日もよろしくお願いします。

4日目：今日学習したこと

指導を受けた点

- ・ベッドから車いすへ移乗する際、端座位の位置で一度顔をうかがう。
- ・車いすにブレーキがかかっているか確認
- ・利用者さんの体になるべく自分の体を近づける
- ・車いすを押す時、利用者さんの手の位置を確認し、巻き込み防止を行うなど

ケア会議に参加して

栄養士さんを中心に利用者さん一人ひとりについて、体重の増減や食事量などをもとに職員さん同士でケアについて話し合われていた。職員さん同士意見を言い合い、よりよい介助をしようという思いが伝わってきた。

喫茶の日を体験して

月に1回喫茶の日を行っている。ダイルームの机にテーブルクロスを広げ、メニュー表を置く。また職員室をカウンターにみだるといふ細かな心使いがされていた。利用者さんはとても楽しそうに自分の食べたいメニューを選ばれていた。施設ではアルコールはとらないと思っていたけれど、利用者さんの様子から月に1回のこの日をとても楽しみにされていることがわかった。歌をうたわれたり、利用者さん同士お話をされたり、アルコールを飲んだり、いつもより活気のあるダイルームだった。職員の方もとても楽しそうに利用者さんとお話をされていた。

感想

喫茶がとても楽しかった。ノンアルコールのビールを飲む利用者さんの生き生きとした表情が印象に残った。利用者さんと職員さんが一緒になって楽しむ行事はとても大切だと感じた。明日もよろしくお願いします。

次は5日目の朝におこなった巡回指導記録である。

前回実習から何が良くなっていますかという問いを行う。堰を切ったようにどんと話しが弾む。

- ・コミュニケーション力がアップしている。
- ・少し自信をもって介護することができるようになった。
- ・利用者のいろいろな表情がみえるようになった。

例えば

- ・お盆期間にあたり利用者への遠方からの面会者が多いこと、それらは遠方に住んで帰省した子供や孫たちであることが、利用者の表情やことばから理解できていた。

実習記録のテーマが少なくなっていることについての指導

- ・施設の中での楽しみは何かをしてみると 喫茶の日があり、ノンアルコールビールなどを楽しみにしている老人がいた。また個別外出の日が設定されており、職員と外出して温泉に行くなどが行われている。また食事にしても選択メニューとなっている日があり、食事に対しても変化が作られている。
- などに気づいていた。

前回の実習指導の後、利用者さんと職員の介護関係を観察し（下線 ）感動したという内容が記述されている。何がよくなっていますかという単純な問いで、感動したことが堰をきったように学生から飛び出してきた。ここで「利用者のいろいろな表情がみえてきた（下線 ）」という言葉をつかみ、さらに具体的に問うと、お盆期間であることから面会者と利用者との関係についてよく観察できていることが分かる。そのことを賞賛（コンプリメント）する。

その日の実習記録にはつぎのような感想が記述されていた。

感想

先生からアドバイスをいただき、今日一日利用者さんの表情に注目してみた。一人一人違う笑みを浮かべ、一日のうちに多くの表情をされていることがわかった。利用者さんの表情には、職員さんの声かけ、動作、ちょっとしたいたずらなど、職員さんが大きく関わっていた。日々の生活で利用者さんにとって職員さんの影響が大きいことをあらためて実感した。

以前よりも利用者さんと職員の関係について観察することができるようになっており、利用者さんの生活に職員の応答が大きく関わっていることについて着目するようになっている。

その後7日目、実習後半に入ってから巡回指導記録である。

実習の後半に入り、テーマとしていることについて問う。
「職員と利用者さんとの関係をよくみる。利用者さんの表情や気持ちの現われている言動をよく観察する」と答えた。

問い2：「利用者さん同士で仲のよい方がいますね。その方々はどのようにして仲良くなれたのでしょうか?」「どうしてそれが続いているのでしょうか?」

この答えから、ピアカウンセリング概念を説明し、高齢者においてもピアカウンセリングが行えること。また自然に話しあいのなかでされていることなどを説明した。

また、このような利用者同士の関係性をつなぐケアは、通所介護サービスにおいてもよく行われているもので、できればデイサービスなども見学してみるとよいと指導。

本人から相談：「介護の素敵な言葉」が見つけれないので、どうしたらよいでしょう。介護職員と私の対話をした場面をもとに、何を素敵な言葉というのかということを確認してもらおう。懸命に探そうとすると逃ししてしまうようなものであり、クスクスと笑えるような、そんな小さなことを探そうと指導。

実習後半のテーマを確認すると、前半の実習で発見した「利用者さんと職員の関係の深さ」を主題にしていた。利用者さん同士での関係性にも視野を広げるために、問い2を作って、指導を進めた。また本人からの相談にあるように、もっとよい関係を見つけようとする意識が働きすぎるようになり懸命に探そうとすることのため、素直に観察できない状況と判断した。クスクス笑えるような些細な小さなことに注目し、それを解釈するように指導した内容である。

その巡回日の学生の実習記録である。

感想

日を追うごとに一日一日がとても早く過ぎる。利用者さんの笑顔、言葉がとても嬉しくて、幸せな気持ちになる。会話の難しい利用者さんや、何かを伝えようと口を動かしてくれる方、目で訴える方などの気持ちをもっと理解したい。自分のする事を伝えたいという気持ちが強くなり、利用者さんをよく見るようになれた。明日もよろしくお祈りします。

Kさんの場合は、実習過程でたくさんの心を動かす場面を観察し、それを丁寧に実習記録に記述することが先にできていた。その感動について実習巡回指導という面談のなかで教員に報告することで、より鮮明に介護福祉の概念価値と結びつけることが出来ていき、実習過程を展開させることができたものである。

(3) Hさんの場合—巡回指導での面談内容が実習過程の展開に影響していた例

まず初日のHさんの実習記録を引用する。Hさんも6月の実習に続き、同じ特別養護老人ホームでの実習である。もう一人の実習生も前回の6月実習と同じ学生であった。

1日目：指導をうけた内容：

ラップ療法について（省略）

感想：2ヶ月ぶりの実習ということもあって、緊張してしまった。声かけも不足していたと思うので、明日からの実習ではしっかりと声かけし、周りの状況を見て行動したいと思った。また床掃除をしていた時に、利用者さんがトイレから帰ってくる 利用者さんの手を引いて助けあっていたあたたかい場面を見る事ができた。

自己学習の記録

いよいよ後期実習が始まった。まずは施設の流れをつかみコミュニケーションをとることを目標にした。しかし声かけも不足してしまい周りの状況を見る事もおろそかになってしまった。排泄物交換ではラップ療法という褥瘡処置の方法を教わった。ラップ療法とは、普通のビニール袋に穴をあけて、その中に吸収力の多いパットを入れてそれをオムツに敷く方法。たくさんの薬をつかっても褥瘡がなおらなかった利用者さんが、施設でこのラップ療法を試行した結果、新しい皮膚が出来てくることができたそうだ。職員さんからは寝たきりになってしまったから、何もできなくなってしまったのではなく、しっかり自分の力で傷を治すことができるのだよと教えて頂いた。

{介護の素敵な言葉集} 1日目

ある利用者さんが「助けてえ」と言っていたら、職員さんが「私たちも神様も全員でTさんを助けますので、安心してください」と言ったら、Tさんが「神様ありがとう」と言った一言。

初日午後4時での巡回指導を行った記録である。

昨夜眠れなかったほど緊張している。原因は前回の実習記録の指導者のコメントで、言葉の使い方について指摘されていたことであった。自分の言動をどのように見られているのかという恐怖感があると説明。

話すうちに、夕方の今になってきたらだいが落ち着いているのだけれどという話。とにかく初日の緊張感と同じ実習先であっても相当なものと思えた。よく逃げなかったねとコンプリメント。当たり前でしょうと二人に一笑される。緊張感とともに実習にむかう意欲が感じられた。

この段階では、Hさんの についての観察内容について私は知らない。実習初日から課題として加えた「介護の素敵な言葉」の聞き取り記録がされているとは思っていなかったためである。その後の実習記録にはつぎのように、利用者同士の支えあいの場面が記述されている。

- ・ボランティアの方が多く地域の人と一緒に施設を支えているのだと気づいた。
- ・コミュニケーションの時に利用者のNさんとTさんが普段から仲が良く、Tさんが「仲良しだね」とNさんに言うと、Nさんは笑顔で得なずいていた。あたたかい場面に立ちあうことができた。
- ・コミュニケーションと入浴介助についてたくさん学んだ。コミュニケーションでは耳を傾けて利用者さんに近づくことで、利用者さんとの心の距離も近づくし話しも聞けることに気づいた。（以下省略）

{介護素敵な言葉集} 2日目

入浴介助の時の利用者さんは脳の病気を持っていて、左の手足が思うように動かなくて「だるまの状態でももできなくてごめんね。こんなに丁寧にやってもらえて、本当にありがとう」と涙を浮かべて言っていた時。「ありがとう」のパワーと重さを感じた。

4日目におこなった巡回指導記録の内容である。

4日目；指導内容

スケーリング・クエッションで質問をする。

「すばらしいと思う職員さんをあげて、そのレベルを10とすると、今の自分は」という問いに2と答える。その理由をさらに問うと、それはまだ排泄物をみてあせっている自分がいるからという。でもそれに気づいているねとコンプリメントをする。そのすばらしい職員はどこがすごいと思うか問うことから、利用者さんにどのようにして安心してもらえるよう根拠を知らながらケアをしたいと今の自分の学習テーマが明確になった。また実習報告会で自分が報告した内容「第一印象のみで判断しない」ということに言及。同じ実習先で2ヶ月後に再度実習してみて、同じ対象者でありながら、まったく状態が異なることに驚いていた。

また、前回の実習では見過ごしていた利用者同士の相互の助け合いの様子や利用者さんの、いろいろな言葉が聞こえてくる気持ちのよい感触について報告していた。

同日のHさんの実習記録である。褥瘡のケアについて学ばなかで、褥瘡のできる原因について指導を受けた内容が記載されており、なぜこのようにするのか根拠を考えながら介護をすることが自信につながり、これが私の目標としたいという気持ちが表現されている。

4日目：指導をうけた内容

- ・排泄物交換のポイントを詳しく教えて頂いた。
- ・ラップ療法について、ラップ療法処置前の写真と3週間後の状態の写真を比較して（*図示）。褥瘡のできる原因には、衛生状態・栄養・皮膚の状態などの原因がある。

自己学習の記録

- ・昨日に引き続き排泄物交換の際のポイントを学んだ
 - 1) 尿（*尿路感染）で熱が出てしまうこともあるので、陰部は清潔に保つこと。
 - 2) 体位変換の時に膝や肩に支点をおいて動かすことで安楽な体位を保つことができる。
- ただ単に排泄物交換をするのではなく、なぜこのようにするのか根拠を考えながらすること、自信を持つ事が自分の目標だと気づいた。

その後、連日の実習記録には、利用者職員、利用者同士の支え合いの関係についての記述、介護行為に裏にある目的や理由の存在についての記述が次のようになされていた。

朝の食事介助の時に前期実習の時には1～2回食事介助をさせて頂いたNさんの素敵な言葉。私がNさんに「お豆腐好きですか」と尋ねると、普段は「あー」としか言わないNさんが「大好き。世界一幸せ。ありがとう」と言った言葉に感動した。

利用者Hさんが入浴から戻られている時の会話です。「Hさんお部屋に着きました」と声かけをすると、「Hさん寝床へ帰ります。また来ます、よろしく願います」と笑顔で返答してくれた。

後半の実習の目標

例えば枕を利用者さんの腰に挟むというのは1つの行為であるが、それには必ず目的や理由があるので、それを考えながら相手のことを考え、周りを見て行動して行きたい。

6日目の巡回指導記録である。実習後半の目標の確認をおこなった。目標を自分の言葉で具体的に表現させることにより、上記の の実習記録の文章が描かれていく。

実習後半の実習目標について話しあう。行為の目的やケアの根拠について質問すること。また認知症の方がたくさん住まう棟なので、利用者さんの表情の変化を読み取り、気持ちを理解することと答える。

今の自分の状態をスケーリング・クエッションで聞く。最高の状態を10とすると、今は6。心はすごく気持ち良いが、体力がなくなってきた、疲労感があることから。

面談をケアワーカー室でおこなっていたところ、お盆である男性利用者さんのところに大集団の面会者があった場面に遭遇した。その場面をよくみてもらい、利用者さん、家族の気持ちを想像させてみた。

以降の実習記録は、一人ひとりの状態にあったケアをしていることの大切さ、利用者と職員のよい関係のなかで、自分のやさしい気持ちになっていく様子、その結果生まれる信頼関係について理解したことが記述されていた。

7日目：指導をうけた内容

入浴介助

- ・陰部、体、顔用の3種類の色のタオルで使い分けられている。
- ・シャワー浴の時はすぐに体がひえてしまうので、タオルをかけてお湯をかけることで体温が温存される。
- ・お湯のなかに入浴剤を入れることで色も匂も入浴を楽しむことができる。
- ・入浴介助を終える時はしっかり足や腕を洗い、菌などが利用者さんにうつらない(*感染しない)ように配慮されていた。
- ・(感想)ちょっとした気遣いや心配りで入浴の時間を楽しんで頂ける介助をお手伝いしていきたいなと思った。

自己学習の記録

- ・傷ひとつにしてもその人の皮膚の状態・栄養の状態があるように、その人にあった処置を考えることも大切で、オムツの種類もいろいろあり、その人にあった物を選ぶことの大切さも同時に教わった。やはり一人一人にあったケアをしていくことはとても大切なんだと実感した。
- ・入浴介助でのポイント(省略)

つぎは8日目の巡回指導記録である。最後の巡回指導である。

8日目；指導内容

最後の巡回指導となる。一番素敵だとももう職員をあげて、その人を10とすると今のあなたはというSQで問う。4日目に行ったSQと同じ職員をあげる。

初日の時は2。今は3くらい。今回の実習では、何につけても、なんでだろう?と疑問を浮かべ、職員さんに聞き、そして適切な指導を受けることが多かった。疑問がよくでてくるようになってきたことが、2から3にあがった違いと説明。

施設になれてくることから、次第に自分にも落ち着きが生まれ、利用者さんとの信頼ができてきていると今の状態を説明している。具体的にはどうしてそう思う?と問うと、利用者さんから肩もみしてもらったことや、手が大きくて暖かいねと誉められたことを話す。また前に来たときと髪形が変わったねと言われた事などから、お年寄りが関心をもってみていてくれるという感じをつかんでいた。それは「利用者さんが気づかせてくれる」という言葉に象徴されていた。自己評価の得点60点。案外低いのに少し驚く。

最後の残り2日間の自己課題について問う。

「1分1秒を大切にしていこう」と答える。

当日の実習記録には、巡回指導でまとめた内容が次のように要約されて記述されていた。

8日目：感想

・実習も8日が終わり、だんだんと施設になれてきた。職員さんや利用者さんの素敵な言葉がたくさん聞けてとても心がやさしい気持ちになった。職員のWさんに分からないことを聞いたところ、利用者さんに行っている事で意味がないことは一つもないという言葉は私の胸に響きました。残りあとわずかになった実習。もっとしっかりと目標をもち、感謝して1分1秒を大切に実習して行きたいと思います。

自己学習の記録

床拭きをしている時に利用者Hさんに両肩をもんでもらい、「ご苦労様」と言っていただいたことや手洗いのお手伝いをしていた時にYさんに「あなたの手大きくて温かいね」と言っていただいたことから、信頼関係の重みに気づいた。確かに時間もかかることかもしれないけれど、信頼関係ということは本当に大切に、生きていたり、生活していたりしていたら、見えなくなってしまうものを心で確認できた。

{介護素敵な言葉集}

私が床拭きをしている時に利用者さんが両肩をもんでくれて「おつかれさま」と言ってくれた言葉がとても嬉しかった。

食事準備の時に手洗いのお手伝いをしていた時に、「あなたの手、大きくて温かいね」という言葉をかけていただいた。

利用者のNさんに「何か飲物飲みますか？」と尋ねると、「お酒かビールがいい！」という言葉はステキだった。

4. 結果

- (1) Tさん(女子・1人実習・身障)の場合、実習記録の考察欄に気づきや発見した内容が具体的な記述がされていないため、巡回指導での面談内容がどのように影響しているかは、記録上からはなんともいえない。
- (2) Tさんの実習終了レポート内容はほとんどがネガティブな反省内容のみで記述されているが、他の2名は新たな発見、自分自身の成長、信頼関係の構築、プライバシー侵害への戒め、命の大切さ、友達の尊さ、利用者さんからの表情やしぐさでの応答の尊さ、介護のやりがい等、自分自身と実習体験に良い評価を与えていた。
- (3) Kさんの場合は、実習での気づきが先行し、巡回指導の面談により、介護福祉の価値概念が付与され、その後の実習過程展開のなかで、その気づきの質の変化がみられた。
- (4) 上記とは逆に、Hさんの場合は巡回指導記録に最初にあらわれたキーワードが学生の実習記録上に類語、類概念として記述されており、実習経過とともに質の変化がみられた。

5. まとめ

- (1) 学生は実習体験によって非常に多くの現象を経験したり見たりしているが、それは無意識的かつ価値付けのされないままに記憶されている。
- (2) 構造化された巡回指導面接によって、そのような未整理の情報・印象を一つの介護福祉や対人援助に関する概念などに結びつけて、その意義を解釈することができる。
- (3) 解釈した意義について、さらに施設利用者や職員との関係の中で、拡大して見いだそうとする意識が起こり、実習の経過とともに質が変化していく。

- (4) 学生の無意識的な体験は構造化された巡回指導面談によって意識された経験知識とすることができ。それは、いわば学生の一步後ろからリードする巡回指導面談といえる。

参考文献

- P・デイヤング&I・K・バーグ：解決のための面接技法<第2版>：金剛出版：2004
I・K・バーグ&T・スタイナー：子どもたちとのソリューション・ワーク：金剛出版：2005

